

会期を通じた開催

病院歯科・病診連携シンポジウム | オンデマンド動画

総合病院における歯科の役割

座長:田中 彰(日本歯科大学新潟生命歯学部 口腔外科学講座)、寺中智(足利赤十字病院 リハビリテーション科)

[SY9-OP] 挨拶

[SY9-1] 足利赤十字病院における医科/歯科連携について

○小松本 悟¹ (1. 足利赤十字病院 院長)

[SY9-2] 医科病院における歯科の役割を歯科の専門性から考える

○今井 裕¹ (1. (一社) 日本歯科専門医機構理事長 獨協医科大学名誉教授・特任教授)

[SY9-3] 総合病院における歯科の役割～病院歯科から考える地域における病診連携～

○石井 良昌¹ (1. 海老名総合病院 歯科口腔外科 部長
海老名市歯科医師会 オーラルフレイル・在宅介護担当理事)

[SY9-4] 横浜市鶴見区歯科医師会会長として医科歯科連携構築に向けた挑戦

○佐藤 信二¹ (1. 医療法人BEACHPARK 佐藤歯科医院)

[SY9-CL] 総括

2020年11月8日(日)

A会場

病院歯科・病診連携シンポジウム | ライブ

【質疑応答・ディスカッション】総合病院における歯科の役割

座長:寺中 智(足利赤十字病院 リハビリテーション科)、田中彰(日本歯科大学新潟生命歯学部 口腔外科学講座)
16:40 ～ 17:00 A会場

[SY9-OP] 挨拶

[SY9-1] 足利赤十字病院における医科/歯科連携について

○小松本 悟¹ (1. 足利赤十字病院 院長)

[SY9-2] 医科病院における歯科の役割を歯科の専門性から考える

○今井 裕¹ (1. (一社) 日本歯科専門医機構理事長 獨協医科大学名誉教授・特任教授)

[SY9-3] 総合病院における歯科の役割～病院歯科から考える地域における病診連携～

○石井 良昌¹ (1. 海老名総合病院 歯科口腔外科 部長
海老名市歯科医師会 オーラルフレイル・在宅介護担当理事)

[SY9-4] 横浜市鶴見区歯科医師会会長として医科歯科連携構築に向けた挑戦

○佐藤 信二¹ (1. 医療法人BEACHPARK 佐藤歯科医院)

[SY9-CL] 総括

病院歯科・病診連携シンポジウム | オンデマンド動画

総合病院における歯科の役割

座長:田中 彰(日本歯科大学新潟生命歯学部 口腔外科学講座)、寺中 智(足利赤十字病院 リハビリテーション科)

【田中 彰先生略歴】

1990年：

日本歯科大学新潟歯学部卒業

1994年：

日本歯科大学大学院新潟歯学研究科修了

1995年：

日本歯科大学新潟歯学部口腔外科学第2講座 助手

2002年：

日本歯科大学新潟歯学部口腔外科学第2講座 講師

2005年：

日本歯科大学新潟歯学部附属病院 口腔外科 准教授

2012年：

日本歯科大学新潟病院 口腔外科 教授

2013年：

ベルン大学医学部 頭蓋顎顔面外科学講座 留学

2014年：

日本歯科大学新潟生命歯学部 口腔外科学講座 教授

現在に至る

【寺中 智先生略歴】

平成15年3月：

神奈川歯科大学 卒業

平成15年4月：

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科高齢者歯科学分野

平成19年3月：

同大学院修了 歯学博士

平成19年4月：

同大学歯学部付属病院 スペシャルケア外来 医員

平成22年\4月：

同大学院 特任助教 摂食リハビリテーション外来（両兼任）

平成25年12月：

足利赤十字病院リハビリテーション科

令和2年2月：

足利赤十字病院リハビリテーション科 口腔治療室長

現在に至る

資格・役職

日本老年歯科医学会専門医・指導医・代議員

日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士

東京医科歯科大学歯学部附属病院臨床研修歯科医指導医

北関東摂食嚥下リハビリテーション研究会事務局長

AHA認定 ACLSヘルスプロバイダー

[SY9-OP] 挨拶

[SY9-1] 足利赤十字病院における医科/歯科連携について

○小松本 悟¹ (1. 足利赤十字病院 院長)

[SY9-2] 医科病院における歯科の役割を歯科の専門性から考える

○今井 裕¹ (1. (一社)日本歯科専門医機構理事長 獨協医科大学名誉教授・特任教授)

[SY9-3] 総合病院における歯科の役割～病院歯科から考える地域における病診連携～

○石井 良昌¹ (1. 海老名総合病院 歯科口腔外科 部長 海老名市歯科医師会 オーラルフレイル・在宅介護担当理事)

[SY9-4] 横浜市鶴見区歯科医師会会長として医科歯科連携構築に向けた挑戦

○佐藤 信二¹ (1. 医療法人BEACHPARK 佐藤歯科医院)

[SY9-CL] 総括

[SY9-OP] 挨拶

[SY9-1] 足利赤十字病院における医科/歯科連携について

○小松本 悟¹ (1. 足利赤十字病院 院長)

【専門分野】

神経内科、病院経営学

【略歴】

1975年：

慶應義塾大学医学部卒業

1979年：

慶應義塾大学大学院卒業 医学博士取得

1984年：

米国ペンシルバニア大学脳血管研究所留学

1986年：

慶應義塾大学神経内科医長就任

1994年足利赤十字病院 副院長

2008年：

足利赤十字病院 院長

2010年：

慶應義塾大学医学部客員教授

2013年：

獨協医科大学臨床教授

2017年：

日本病院会副会長

【所属学会、資格、役職など】

日本内科学会認定内科医・指導医

日本脳卒中学会専門医

日本医師会認定産業医

日本神経学会認定医・専門医・指導医

日本人間ドック学会認定医

日本頭痛学会専門医・指導医

(はじめに)

足利赤十字病院は栃木県南部に位置し、三次救命救急センターを有した医療圏（80万人）の唯一の地域中核病院である。病床数は555床、全室個室化した次世代型グリーンホスピタルである。

2010年10月より入院患者の口腔管理や摂食嚥下リハに関わる目的にて、リハ科と歯科チームによる口腔管理ならびに摂食嚥下リハが行われている。

（結果）

脳卒中急性期患者の誤嚥性肺炎発症率の年度別推移について、介入前2011年度の誤嚥性肺炎の発症率は、12.2%であったが、2012年度 9.4%、その後の発症率は徐々に減少し、2018年度は3.9%、2019年度は3.3%となった。この結果は、先行研究と比較しても明らかに低い傾向にある。また、在院日数を短縮することが出来、誤嚥性肺炎を抑えることによりベッドの効率的利用が可能となった。歯科チームはリハ患者以外にもがん周術期患者や緩和ケア患者にも関わっている。以上の結果、歯科チームによる医科／歯科連携は、感染症予防、ADL、QOL改善に寄与している可能性があり、医療経営面からみても有益であった。

（まとめ）

地域包括ケアシステムが提唱され、医科歯科連携の重要性が問われている。そのためには、歯科と医科の間で、情報共有する機会が増えることが望まれる。地域包括ケアシステムの中で、病院における医科と歯科の更なる連携強化が期待される。また退院後も地域の医科と歯科とのシームレスな連携が望まれる。

病院経営管理の基本は、患者中心の医療の提供であり、患者満足度や目に見えない付加価値の増大が第一義である。その一環として、当院では医科歯科連携を推進している。口腔衛生管理による感染症対策（誤嚥性肺炎予防）やがん化学療法における口腔粘膜異常の改善、摂食嚥下リハビリテーションを通してADL、QOLの向上を生み出すことである。医科歯科連携を含めた患者満足度や目に見えない付加価値の増大が良質な医療の提供に繋がり、病院経営管理の改善を生み出すこととなる。そして、本シンポジウムでは病院歯科の必要性について、その齎す効果と医療経済的な視点にも言及したい。

[SY9-2] 医科病院における歯科の役割を歯科の専門性から考える

○今井 裕¹（1.（一社）日本歯科専門医機構理事長 獨協医科大学名誉教授・特任教授）

【略歴】

生年月日：

1949年2月14日生

学歴・職歴

1973年3月：

神奈川歯科大学歯学部卒業

1973年5月：

千葉大学医学部歯科口腔外科学講座研修医

1985年10月：

文部教官千葉大学医学部 歯科口腔外科学講座 講師

1988年1月：

獨協医科大学 口腔外科学講座 講師

1991年～1992年：

アメリカ合衆国北カロライナ大学歯学部 客員研究員

1995年7月：

獨協医科大学 口腔外科学講座 助教授

2001年：

アメリカ合衆国UCLA校歯学部客員研究員

2003年4月：

獨協医科大学口腔外科学講座 主任教授

2014年3月：

獨協医科大学定年退職

2014年4月～：

獨協医科大学 名誉教授・医学部特任教授

タイトル

学位（医学博士・千葉大学）

日本口腔外科学会認定医（認定医登録番号269）

日本口腔外科学会指導医（指導医登録番号258）

臨床修練指導歯科医（厚生省登録番号166）

日本顎顔面インプラント学会指導医（指導医登録番号7）

がん治療暫定教育医（歯科口腔外科）

日本小児口腔外科学会指導医（指導医登録番号38）

日本有病者歯科医療学会指導医・認定医（指導医・認定医登録番号0001）

日本口腔腫瘍学会暫定口腔がん指導医

社会活動・役職

（一社）日本歯科専門医機構理事長

（一社）日本歯学系学会協議会 副理事長

（一社）日本有病者歯科医療学会 理事長

日本歯科医学会 理事

(NPO) 日本・アジア健康科学支援機構 理事長

(財団) 獨協国際学術交流基金 監事

歯学系学会社会保険委員会連合 監事

（公社）日本口腔外科学会 名誉会員

（NPO）日本口腔科学会 名誉会員

病院における歯科の役割とは、「歯科医療とは何か？」を問われている極めて重いものである。そこで、わが国における歯科のこれまでの経緯を振り返りながら、本課題について思料したいと思う。

わが国における歯科は、明治維新以前は口中科を専門にする医師が口、喉、歯の治療を行い、明治となり1874（明治7）年医制が公布され、1875年小幡英之助が「歯科を専攻する医師」として登録されている。つまり、歯科は医科の一分野として存在していたのである。一方、1839年米国ボルチモアで歯科医学校が創立され、医科の一分科であった歯科が分離し、アメリカ特有の歯科医療技術を発展させてきた。このアメリカ学派の歯科は、留学生であった小幡らによりわが国に伝えられ、歯科を医科から分離すべきかの論争を起し、遂には1906年「歯科医師法」が制定され、歯科は医科とは別の道を歩むことになる、わが国の歯科の原点となったものである。戦前の歯学教育は専門学校で行われ、原則として歯およびその周囲組織に対象が限られていた職業教育であった。第二次世界大戦後、学制改革により新制の歯科大学となり、口腔機能の観点から歯科医療を考えるようになり戦前の職業教育からの脱皮が図られた。その後、わが国の経済発展に伴い社会は多様化し、医科では医療の機能分化が進められ、歯科においては専門化が進み教育の現場に取り入れられたが、残念ながら歯科医療としての対応はなかった。

このような中、歯科では歯科病院或いは医科病院歯科（口腔外科）のみが医療の機能分化に模した形態で、2次、3次歯科医療の役割が課せられ、特に歯科大学がない地方では病院歯科は高度歯科医療の担い手、或い

は研修の場として重要な役割を果たしている。一方、診療領域の問題、機能分化に即した歯科医療の提供ができない歯科医師の存在、そして診療報酬上の不利益等の問題より、医科病院歯科は減少の途を辿っている。そして今、社会環境の急激な変化が進み、また、全身に対する口腔の健康の位置づけが明確になる中、歯科医療の在り方についてもパラダイムの変換が求められている。われわれは社会の要請に責務を果たすことは当然であり、病院歯科がその担い手となることに異存はない。その上で、歯科全体を俯瞰し、歯科における専門性の必要性や地域の特殊性も勘案したうえで、医科病院における包括的口腔健康管理はどうあるべきかを論じるべきであると思われた。

[SY9-3] 総合病院における歯科の役割～病院歯科から考える地域における病診連携～

○石井 良昌¹ (1. 海老名総合病院 歯科口腔外科 部長 海老名市歯科医師会 オーラルフレイル・在宅介護担当理事)

【略歴】

1990年3月：

日本歯科大学歯学部 卒業

4月：

東京医科歯科大学第二口腔外科 入局

2001年4月：

海老名総合病院 歯科口腔外科 医長

2008年6月：

海老名総合病院 歯科口腔外科 部長

日本歯科大学生命歯学部 客員教授 / 鶴見大学歯学部 非常勤講師

海老名市歯科医師会 オーラルフレイル・在宅介護担当理事/日本口腔外科学会代議員 専門医

日本有病者歯科医療学会代議員 指導医 / 日本臨床栄養代謝学会理事 認定歯科医

日本病院歯科・口腔外科協議会 理事 / 日本病院会 栄養管理委員会委員

日本リハビリテーション栄養学会 学術評議委員 / 神奈川摂食嚥下リハビリテーション研究会 会長

病院歯科から考える地域における病診連携とはどのように考えていけばよいのだろうか。かかりつけ歯科医機能強化型歯科診療所（か強診）や在宅療養支援歯科診療所（歯援診）の届出基準でも医科歯科連携は必須となった。さらに歯科訪問診療料の地域医療連携体制加算の施設基準では、連携保険医療機関として病院歯科は設定され、病院歯科の役割として地域医療連携体制の円滑な運営を図るためのハブとなることが求められている。

診療報酬改定においても平成24年周術期（等）口腔機能等管理、平成28年 NST連携加算、平成30年度診療情報連携共有料が新設されるなど医科的知識の向上のみならず、医師と顔のみえる関係・より良好な医科歯科連携を構築する必要となった。しかし多くの地域歯科医師会会員にとって、高次歯科医療機関へ紹介すればよいという医科歯科連携であり、連携は「自分ごと」となっていなかった。

そこで海老名総合病院では、「地域力を向上させる」目的で海老名市歯科医師会と協働で2012年8月に歯科登録医制度を策定、海老名市歯科医師会会員施設の歯科医師、歯科衛生士に向けた On the Job Training(OJT)の場の提供を開始した。現在までに273名（39名/年平均）が、外来診療、NST、嚥下外来、口腔外科全身麻酔手術、口腔ケア、周術期口腔機能管理などの研修に参加することで、地域会員の意識改革につながり、わずかではあるが地域力の向上が図れていると感じている。

地域包括ケアシステムのなかで地域歯科医師会と病院歯科を歯科の One Teamとするためにも、有機的な相互の

働きかけ・歯科医師会会員制度の再考も重要である。そして歯科医療職種に期待される「食べる」という大きな役割を多職種連携で行える人材育成することで、病院歯科・地域歯科医師会として貢献していきたい。

[SY9-4] 横浜市鶴見区歯科医師会会長として医科歯科連携構築に向けた挑戦

○佐藤 信二¹ (1. 医療法人BEACHPARK 佐藤歯科医院)

【略歴】

1999年：

鶴見大学歯学部卒業

2000年：

鶴見大学歯学部保存修復学講座入局

2002年：

佐藤歯科医院勤務

2011年：

民生委員・児童委員

2014年：

鶴見大学地域保健学教室非常勤講師

2015年：

鶴見区歯科医師会 学校歯科委員会 理事

一般社団法人横浜市歯科医師会 学校歯科保健委員会 常務理事

2017年：

医療法人BEACHPARK 佐藤歯科医院 理事長

鶴見区歯科医師会 会長

一般社団法人鶴見医師歯科医師会 副理事長

一般社団法人横浜市歯科医師会 学校歯科保健委員会 常務理事

2019年：

鶴見区歯科医師会 会長

一般社団法人横浜市歯科医師会 総合企画委員会 常務理事

現在に至る

口腔の全身への影響が認識され始める中、日本国の方向性を定める2018年の骨太の方針においては、「地域における医科歯科連携の構築」の推進が盛り込まれ、2019年の素案では「医科歯科連携領域のエビデンスの蓄積、国民への適切な情報提供、フレイル対策における歯科医師・歯科衛生士の役割、多職種連携の構築」などが盛り込まれたのは周知の通りである。

私が鶴見区歯科医師会（以下、鶴歯）の理事であった2007年、地元で済生会横浜市東部病院（以下、東部病院）が完成された。この時は、医科と歯科による周術期連携等について、徐々に注目されてきた頃である。私が鶴歯の会長になった2017年より東部病院と更なる連携を本格的に開始した。

会長就任後、最初に東部病院の患者支援センター長と面談し、病院内での周術期口腔機能管理における現状把握と鶴歯との連携強化を行った。また年2回、東部病院と地域医療との連携について合同委員会を開催し、入院日数の変化、合併症発症数をはじめとした周術期口腔機能管理に関するデータを共有している。本シンポジウムでは、東部病院との医科歯科連携に至るまでの過程と今後の展望をお話したい。

また、昨年3月より横浜市鶴見区ではICTを活用した「サルビアねっと」を開始した。これは、日本で初めての都

市型 ICT連携であり、三師会や東部病院を始めとした地域の中核病院などから代表者が参加し、1年半ほど会議を重ね、時間をかけて開発された地域医療連携ネットワーク推進事業である。

例えば有病者の抜歯が必要と判断した際に、「サルビアねっと」の患者データを見てみると、糖尿病のためどの病院にかかっているか、どのような薬を服用しているかなどが把握でき、抜歯前後における医科対診の必要性に変化が出てくる。特に訪問診療では、タブレットを持って行けば、その場で患者の情報を確認することもできる。現在登録している患者は、7800名程度だが、これから誰もが活用できるように、さらに推進役として歯科医師会に対応していく必要がある。電子カルテのような医療情報リソースを地域の医療・介護従事者間で共有する仕組みとして、鶴見区を中心とした医療機関・介護施設等が参加する「サルビアねっと」の運用を含めた医科歯科連携の構築について述べたい。

[SY9-CL] 総括

病院歯科・病診連携シンポジウム|ライブ

【質疑応答・ディスカッション】総合病院における歯科の役割

座長:寺中 智(足利赤十字病院 リハビリテーション科)、田中 彰(日本歯科大学新潟生命歯学部 口腔外科学講座)

2020年11月8日(日) 16:40 ~ 17:00 A会場

【寺中 智先生略歴】

平成15年3月:

神奈川歯科大学 卒業

平成15年4月:

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科高齢者歯科学分野

平成19年3月:

同大学院修了 歯学博士

平成19年4月:

同大学歯学部附属病院 スペシャルケア外来 医員

平成22年\4月:

同大学院 特任助教 摂食リハビリテーション外来(両兼任)

平成25年12月:

足利赤十字病院リハビリテーション科

令和2年2月:

足利赤十字病院リハビリテーション科 口腔治療室長

現在に至る

資格・役職

日本老年歯科医学会専門医・指導医・代議員

日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士

東京医科歯科大学歯学部附属病院臨床研修歯科医指導医

北関東摂食嚥下リハビリテーション研究会事務局長

AHA認定 ACLSヘルスプロバイダー

【田中 彰先生略歴】

1990年:

日本歯科大学新潟歯学部卒業

1994年:

日本歯科大学大学院新潟歯学研究科修了

1995年:

日本歯科大学新潟歯学部口腔外科学第2講座 助手

2002年:

日本歯科大学新潟歯学部口腔外科学第2講座 講師

2005年:

日本歯科大学新潟歯学部附属病院 口腔外科 准教授

2012年:

日本歯科大学新潟病院 口腔外科 教授

2013年:

ベルン大学医学部 頭蓋顎顔面外科学講座 留学

2014年:

日本歯科大学新潟生命歯学部 口腔外科学講座 教授

現在に至る

[SY9-OP] 挨拶

[SY9-1] 足利赤十字病院における医科/歯科連携について

○小松本 悟¹ (1. 足利赤十字病院 院長)

[SY9-2] 医科病院における歯科の役割を歯科の専門性から考える

○今井 裕¹ (1. (一社) 日本歯科専門医機構理事長 獨協医科大学名誉教授・特任教授)

[SY9-3] 総合病院における歯科の役割～病院歯科から考える地域における病診連携～

○石井 良昌¹ (1. 海老名総合病院 歯科口腔外科 部長 海老名市歯科医師会 オーラルフレイル・在宅介護担当理事)

[SY9-4] 横浜市鶴見区歯科医師会会長として医科歯科連携構築に向けた挑戦

○佐藤 信二¹ (1. 医療法人BEACHPARK 佐藤歯科医院)

[SY9-CL] 総括

(2020年11月8日(日) 16:40 ～ 17:00 A会場)

[SY9-OP] 挨拶

(2020年11月8日(日) 16:40 ～ 17:00 A会場)

[SY9-1] 足利赤十字病院における医科/歯科連携について

○小松本 悟¹ (1. 足利赤十字病院 院長)

【専門分野】

神経内科、病院経営学

【略歴】

1975年：

慶應義塾大学医学部卒業

1979年：

慶應義塾大学大学院卒業 医学博士取得

1984年：

米国ペンシルバニア大学脳血管研究所留学

1986年：

慶應義塾大学神経内科医長就任

1994年足利赤十字病院 副院長

2008年：

足利赤十字病院 院長

2010年：

慶應義塾大学医学部客員教授

2013年：

獨協医科大学臨床教授

2017年：

日本病院会副会長

【所属学会、資格、役職など】

日本内科学会認定内科医・指導医

日本脳卒中学会専門医

日本医師会認定産業医

日本神経学会認定医・専門医・指導医

日本人間ドック学会認定医

日本頭痛学会専門医・指導医

(はじめに)

足利赤十字病院は栃木県南部に位置し、三次救命救急センターを有した医療圏（80万人）の唯一の地域中核病院である。病床数は555床、全室個室化した次世代型グリーンホスピタルである。

2010年10月より入院患者の口腔管理や摂食嚥下リハに関わる目的にて、リハ科と歯科チームによる口腔管理な

らびに摂食嚥下リハが行われている。

（結果）

脳卒中急性期患者の誤嚥性肺炎発症率の年度別推移について、介入前2011年度の誤嚥性肺炎の発症率は、12.2%であったが、2012年度 9.4%、その後の発症率は徐々に減少し、2018年度は3.9%、2019年度は3.3%となった。この結果は、先行研究と比較しても明らかに低い傾向にある。また、在院日数を短縮することが出来、誤嚥性肺炎を抑えることによりベッドの効率的利用が可能となった。歯科チームはリハ患者以外にもがん周術期患者や緩和ケア患者にも関わっている。以上の結果、歯科チームによる医科／歯科連携は、感染症予防、ADL、QOL改善に寄与している可能性があり、医療経営面からみても有益であった。

（まとめ）

地域包括ケアシステムが提唱され、医科歯科連携の重要性が問われている。そのためには、歯科と医科の間で、情報共有する機会が増えることが望まれる。地域包括ケアシステムの中で、病院における医科と歯科の更なる連携強化が期待される。また退院後も地域の医科と歯科とのシームレスな連携が望まれる。

病院経営管理の基本は、患者中心の医療の提供であり、患者満足度や目に見えない付加価値の増大が第一義である。その一環として、当院では医科歯科連携を推進している。口腔衛生管理による感染症対策（誤嚥性肺炎予防）やがん化学療法における口腔粘膜異常の改善、摂食嚥下リハビリテーションを通してADL、QOLの向上を生み出すことである。医科歯科連携を含めた患者満足度や目に見えない付加価値の増大が良質な医療の提供に繋がり、病院経営管理の改善を生み出すこととなる。そして、本シンポジウムでは病院歯科の必要性について、その齎す効果と医療経済的な視点にも言及したい。

(2020年11月8日(日) 16:40 ～ 17:00 A会場)

[SY9-2] 医科病院における歯科の役割を歯科の専門性から考える

○今井 裕¹ (1. (一社)日本歯科専門医機構理事長 獨協医科大学名誉教授・特任教授)

【略歴】

生年月日：

1949年2月14日生

学歴・職歴

1973年3月：

神奈川歯科大学歯学部卒業

1973年5月：

千葉大学医学部歯科口腔外科学講座研修医

1985年10月：

文部教官千葉大学医学部 歯科口腔外科学講座 講師

1988年1月：

獨協医科大学 口腔外科学講座 講師

1991年～1992年：

アメリカ合衆国北カロライナ大学歯学部 客員研究員

1995年7月：

獨協医科大学 口腔外科学講座 助教授

2001年：

アメリカ合衆国UCLA校歯学部客員研究員

2003年4月：

獨協医科大学口腔外科学講座 主任教授

2014年3月：

獨協医科大学定年退職

2014年4月～：

獨協医科大学 名誉教授・医学部特任教授

タイトル

学位（医学博士・千葉大学）

日本口腔外科学会認定医（認定医登録番号269）

日本口腔外科学会指導医（指導医登録番号258）

臨床修練指導歯科医（厚生省登録番号166）

日本顎顔面インプラント学会指導医（指導医登録番号7）

がん治療暫定教育医（歯科口腔外科）

日本小児口腔外科学会指導医（指導医登録番号38）

日本有病者歯科医療学会指導医・認定医（指導医・認定医登録番号0001）

日本口腔腫瘍学会暫定口腔がん指導医

社会活動・役職

（一社）日本歯科専門医機構理事長

（一社）日本歯学系学会協議会 副理事長

（一社）日本有病者歯科医療学会 理事長

日本歯科医学会 理事

(NPO) 日本・アジア健康科学支援機構 理事長

(財団) 獨協国際学術交流基金 監事

歯学系学会社会保険委員会連合 監事

（公社）日本口腔外科学会 名誉会員

（NPO）日本口腔科学会 名誉会員

病院における歯科の役割とは、「歯科医療とは何か？」を問われている極めて重いものである。そこで、わが国における歯科のこれまでの経緯を振り返りながら、本課題について思料したいと思う。

わが国における歯科は、明治維新以前は口中科を専門にする医師が口、喉、歯の治療を行い、明治となり1874（明治7）年医制が公布され、1875年小幡英之助が「歯科を専攻する医師」として登録されている。つまり、歯科は医科の一分野として存在していたのである。一方、1839年米国ボルチモアで歯科医学校が創立され、医科の一分科であった歯科が分離し、アメリカ特有の歯科医療技術を発展させてきた。このアメリカ学派の歯科は、留学生であった小幡らによりわが国に伝えられ、歯科を医科から分離すべきかの論争を起こし、遂には1906年「歯科医師法」が制定され、歯科は医科とは別の道を歩むことになる、わが国の歯科の原点となったものである。戦前の歯学教育は専門学校で行われ、原則として歯およびその周囲組織に対象が限られていた職業教育であった。第二次世界大戦後、学制改革により新制の歯科大学となり、口腔機能の観点から歯科医療を考えるようになり戦前の職業教育からの脱皮が図られた。その後、わが国の経済発展に伴い社会は多様化し、医科では医療の機能分化が進められ、歯科においては専門化が進み教育の現場に取り入れられたが、残念ながら歯科医療としての対応はなかった。

このような中、歯科では歯科病院或いは医科病院歯科（口腔外科）のみが医療の機能分化に模した形態で、2次、3次歯科医療の役割が課せられ、特に歯科大学がない地方では病院歯科は高度歯科医療の担い手、或いは研修の場として重要な役割を果たしている。一方、診療領域の問題、機能分化に即した歯科医療の提供ができない歯科医師の存在、そして診療報酬上の不利益等の問題より、医科病院歯科は減少の途を辿っている。そして今、社会環境の急激な変化が進み、また、全身に対する口腔の健康の位置づけが明確になる中、歯科医療の在り方についてもパラダイムの変換が求められている。われわれは社会の要請に責務を果たすことは当然であり、病院歯科がその担い手となることに異存はない。その上で、歯科全体を俯瞰し、歯科における専門性の必要性や地域の特殊性も勘案したうえで、医科病院における包括的口腔健康管理はどうあるべきかを論じるべきであると思われた。

(2020年11月8日(日) 16:40 ～ 17:00 A会場)

[SY9-3] 総合病院における歯科の役割～病院歯科から考える地域における病診連携～

○石井 良昌¹ (1. 海老名総合病院 歯科口腔外科 部長 海老名市歯科医師会 オーラルフレイル・在宅介護担当理事)

【略歴】

1990年3月：

日本歯科大学歯学部 卒業

4月：

東京医科歯科大学第二口腔外科 入局

2001年4月：

海老名総合病院 歯科口腔外科 医長

2008年6月：

海老名総合病院 歯科口腔外科 部長

日本歯科大学生命歯学部 客員教授 / 鶴見大学歯学部 非常勤講師

海老名市歯科医師会 オーラルフレイル・在宅介護担当理事/日本口腔外科学会代議員 専門医

日本有病者歯科医療学会代議員 指導医 / 日本臨床栄養代謝学会理事 認定歯科医

日本病院歯科・口腔外科協議会 理事 / 日本病院会 栄養管理委員会委員

日本リハビリテーション栄養学会 学術評議委員 / 神奈川摂食嚥下リハビリテーション研究会 会長

病院歯科から考える地域における病診連携とはどのように考えていけばよいのだろうか。かかりつけ歯科医機能強化型歯科診療所（か強診）や在宅療養支援歯科診療所（歯援診）の届出基準でも医科歯科連携は必須となった。さらに歯科訪問診療料の地域医療連携体制加算の施設基準では、連携保険医療機関として病院歯科は設定され、病院歯科の役割として地域医療連携体制の円滑な運営を図るためのハブとなることが求められている。

診療報酬改定においても平成24年周術期（等）口腔機能等管理、平成28年 NST連携加算、平成30年度診療情報連携共有料が新設されるなど医科的知識の向上のみならず、医師と顔の見える関係・より良好な医科歯科連携を構築する必要となった。しかし多くの地域歯科医師会会員にとって、高次歯科医療機関へ紹介すればよいという医科歯科連携であり、連携は「自分ごと」となっていなかった。

そこで海老名総合病院では、「地域力を向上させる」目的で海老名市歯科医師会と協働で2012年8月に歯科登録医制度を策定、海老名市歯科医師会会員施設の歯科医師、歯科衛生士に向けた On the Job Training(OJT)の場の提

供を開始した。現在までに273名（39名/年平均）が、外来診療、NST、嚥下外来、口腔外科全身麻酔手術、口腔ケア、周術期口腔機能管理などの研修に参加することで、地域会員の意識改革につながり、わずかではあるが地域力の向上が図れていると感じている。

地域包括ケアシステムのなかで地域歯科医師会と病院歯科を歯科の One Teamとするためにも、有機的な相互の働きかけ・歯科医師会会員制度の再考も重要である。そして歯科医療職種に期待される「食べる」という大きな役割を多職種連携で行える人材育成することで、病院歯科・地域歯科医師会として貢献していきたい。

(2020年11月8日(日) 16:40 ～ 17:00 A会場)

[SY9-4] 横浜市鶴見区歯科医師会会長として医科歯科連携構築に向けた挑戦

○佐藤 信二¹ (1. 医療法人BEACHPARK 佐藤歯科医院)

【略歴】

1999年：

鶴見大学歯学部卒業

2000年：

鶴見大学歯学部保存修復学講座入局

2002年：

佐藤歯科医院勤務

2011年：

民生委員・児童委員

2014年：

鶴見大学地域保健学教室非常勤講師

2015年：

鶴見区歯科医師会 学校歯科委員会 理事

一般社団法人横浜市歯科医師会 学校歯科保健委員会 常務理事

2017年：

医療法人BEACHPARK 佐藤歯科医院 理事長

鶴見区歯科医師会 会長

一般社団法人鶴見医師歯科医師会 副理事長

一般社団法人横浜市歯科医師会 学校歯科保健委員会 常務理事

2019年：

鶴見区歯科医師会 会長

一般社団法人横浜市歯科医師会 総合企画委員会 常務理事

現在に至る

口腔の全身への影響が認識され始める中、日本国の方向性を定める2018年の骨太の方針においては、「地域における医科歯科連携の構築」の推進が盛り込まれ、2019年の素案では「医科歯科連携領域のエビデンスの蓄積、国民への適切な情報提供、フレイル対策における歯科医師・歯科衛生士の役割、多職種連携の構築」などが盛り込まれたのは周知の通りである。

私が鶴見区歯科医師会（以下、鶴歯）の理事であった2007年、地元に済生会横浜市東部病院（以下、東部病院）が完成された。この時は、医科と歯科による周術期連携等について、徐々に注目されてきた頃である。私が鶴歯の会長になった2017年より東部病院と更なる連携を本格的に開始した。

会長就任後、最初に東部病院の患者支援センター長と面談し、病院内での周術期口腔機能管理における現状把握

と鶴岡との連携強化を行った。また年2回、東部病院と地域医療との連携について合同委員会を開催し、入院日数の変化、合併症発症数をはじめとした周術期口腔機能管理に関するデータを共有している。本シンポジウムでは、東部病院との医科歯科連携に至るまでの過程と今後の展望をお話したい。

また、昨年3月より横浜市鶴岡区ではICTを活用した「サルビアねっと」を開始した。これは、日本で初めての都市型ICT連携であり、三師会や東部病院を始めとした地域の中核病院などから代表者が参加し、1年半ほど会議を重ね、時間をかけて開発された地域医療連携ネットワーク推進事業である。

例えば有病者の抜歯が必要と判断した際に、「サルビアねっと」の患者データを見てみると、糖尿病のためどの病院にかかっているか、どのような薬を服用しているかなどが把握でき、抜歯前後における医科対診の必要性に変化が出てくる。特に訪問診療では、タブレットを持って行けば、その場で患者の情報を確認することもできる。現在登録している患者は、7800名程度だが、これから誰もが活用できるように、さらに推進役として歯科医師会に対応していく必要がある。電子カルテのような医療情報リソースを地域の医療・介護従事者間で共有する仕組みとして、鶴岡区を中心とした医療機関・介護施設等が参加する「サルビアねっと」の運用を含めた医科歯科連携の構築について述べたい。

(2020年11月8日(日) 16:40 ～ 17:00 A会場)

[SY9-CL] 総括